

# 読書

## ジェンダー平等社会の実現へ 「おかしい」から「あたりまえ」に

杉井静子 著



日本評論社・2400円

すぎい・しずこ 44  
年生まれ。ひめしゅら  
法律事務所所長。『格  
差社会を生きる』ほか

### 憲法根付かせる 使命感を集大成

著者は、家事事件や女性の権利に関わる労働事件を数多く担当し、さまざまな社会活動にも取り組んできたベテラン弁護士である。これまでも著作は多いが、本書は、長年、志をともにしてきた伴侶を亡くしたことを契機に書かれた。民主主義と憲法を社会に根付かせたいとい

う思いでジェンダー平等の実現を願ってきた著者の使命感が、集大成されている感がある。とはいえ堅苦しい本ではない。語り口はやさしく、随所に自身の結婚や育児の体験がでてくる。実務で扱った実例も豊富に引用され、文学作品やテレビ番組も登場する。著者の人間愛

や好奇心が満ち溢れているようだ。しかも、法律や判例などの複雑な内容もよく整理されているから、説得力がある。読者は一挙に読み進められるだろう。内容は多岐にわたり、現代社会のジェンダー平等問題がほぼ網羅されている。家族、戸籍や氏、性的自己決定、女性への暴力、性売買、リプロダクティブ・ヘルス&ライツ（性と生殖に関する健康と権利）、性教育、労働や社会保障、スポーツ界やメディア界の差別など。

本書の最大の特徴は、現代的な課題についても、法制度の解説に終始せず、歴史にさかのぼった深い分析がなされていることだろう。著者は、ジェンダー不平等な日本社会の根底には、いまなお戦前の「家制度」の残滓があるという。「支配と服従」の関係であった「家」制度が残した刻印は、今日にいたるまで、私たちの生活をしばり、ジェンダー平等を妨げている。だからこそ、憲法が描く平和主義と個人の尊厳は重要である。改憲派が考える家族とは、自助・共助が大前提。一方、憲法24条が想定するのは、社会や国家による「公助」が支えている家族だ。いま、全ての分野で、人々が「おかしい」ことには「おかしい」と声をあげることが大切ではないか。本書が発しているこの重要なメッセージを、しっかり受けとめたいと思う。

評者 浅倉むつ子 早稲田大学名誉教授